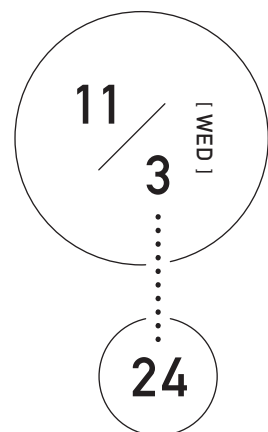


KOKU-HACHI KUKATSU

国8空活

A new space along Route 8.
Will it be just a sidewalk, or will it become a stage
for urban development filled with the smiles and energy of everyone?
A social experiment in Tsuruga is about to begin.



ART ON THE KOKU-HACHI



BACK IN THE DAY

あの日をのぞいて今を描く



TOP MESSAGE

敦賀市長 瀧上 隆信

敦賀市のシンボルロードである国道8号においては、国土交通省及び関係機関の皆様のご協力により、令和2年10月3日に国道8号敦賀空間再整備が完成しました。現在、商店街や民間団体、国土交通省等と連携しながら、2車線化に伴い、新たに生まれた公共空間の活用策を探っています。

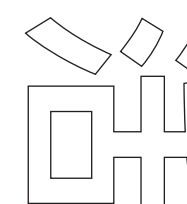
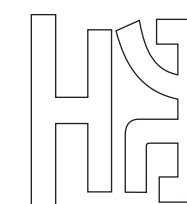
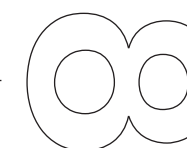
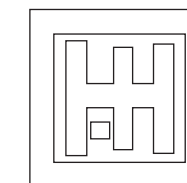
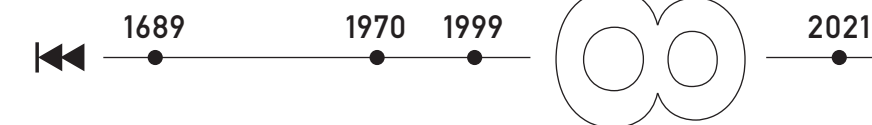
昨年は、11月1日に「食」と「音楽」をコンセプトにした実証実験を開催しました。当日は、天候にも恵まれ、想定を大きく上回る方々にご来場いただき、素晴らしい体験を皆様と共有することができました。この実証実験以降、8号空間を使用したい、という声が沿道商店街や民間団体から多く寄せられるようになり、ケータリングカーの出店から始まった空間利用は、次第に市民による創意工夫を凝らした様々なイベントが開催される空間へと変わってきました。

現在では、毎月第2土曜日を中心に、ケータリングカーや音楽イベント、ダンス発表の他、商店街によるマルシェなども開催されています。イベントには子どもからお年寄りまで訪れていただいておりますが、何より市民の皆様が楽しめる空間を皆様の手で生み出していただいていることを大変嬉しく感じています。

今年の国道8号空間活用実証実験「KUKATSU」は、コロナ禍でも市民の皆様が安全に楽しんでいただきたと考え、密とならないよう約3週間にわたり実証実験を開催します。空間利用の新たな可能性を生み出すため、『アート』をコンセプトに、アーティスト・イラストレーターとして著名な松尾たいこ氏が、まちなか特設アトリエにおいてライブパフォーマンス(作品制作)を行います。

続けて、県内で活躍されている、ストリートアーティストのDAISUKE氏とチョコレートアーティストの石丸智恵氏にご協力をいただき、子どもたちがわくわくと胸が躍るようなまちなかアートを行います。この実証実験を通じて、まちなかにアートが溢れ、アートを眺めながら歩き楽しめる空間になってほしいと願っています。

いま現在も、新型コロナウイルス感染症の影響により、全国的に人が集うイベント等の開催が難しい状況ですが、市民や来訪者の皆様には、実証実験期間中、コロナ対策をとっていただきながら、アートに彩られた新しい「8号空間」をお楽しみください。



ART ON THE KOKU-HACHI

2021.11.3(WED) - 11.24(WED)

BACK IN THE DAY

主催 敦賀市
後援 国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所

協力 本町1丁目商店街振興組合
本町2丁目商店街振興組合
みやがわ果実 つるが丸 奥野食堂 千田書店
リサイクルコレクション モノセブン コドモヤ
丸山薬局 モリカゲ 敦賀駅交流施設オルパーク
アル・プラザ敦賀 福井銀行 北陸銀行
敦賀信用金庫 (有)ミュートス (株)プレス・エー
Ageha Design Studio (株)ジャクエツ
阿部俊二(敦賀市タウンマネージャー)
港都つるが株

Artist 松尾 たいこ DAISUKE
石丸 智恵 窪田製作所

Design Amateur&Co.

お問合せ 敦賀市都市整備部都市政策課
TEL 0770-22-8137

港都つるが株式会社
TEL 0770-20-0015
Facebook minatotsuruga



あの日をのぞいて今を描く

2021



国8空活

2021.11.3 [WED] - 11.24 [WED]

ART ON THE KOKU-HACHI //

アートとまちの歴史が 国道8号で溶け合う

国8空活2021はずっと昔、ちょっと昔のあの日の敦賀を感じながら、まちなかを歩いてみたくなるアートイベントです。今回描かれるのは、イラストレーター「松尾たいこ」が俳人「松尾芭蕉」をオマージュした大型アート作品、そして本町商店街の歴史ある店舗に、県内アーティストによる子ども目線に映る小さなアート作品たち。それに合わせて、すでにあるけど当たり前すぎて目線から見えそうになっている銀河鉄道999/宇宙戦艦ヤマトのブロンズ像にもう一度光を当て、敦賀港開港100周年から今を考える展示を行います。同時にこれまでまちなかに無かったストリートファニチャーも登場します。

EVENT //

A 敦賀はいつも港と鉄道で沸騰する

協力:株式会社ジャクエツ 11.3 [WED] - 11.19 [FRI]

敦賀港開港100周年を記念して行われた「敦賀市シンボルロード化整備事業」。鉄道と港、科学都市をイメージして、松本零士氏の銀河鉄道999、宇宙戦艦ヤマトのブロンズ像を設置しました。これらをまちの資産として、再度誇りが持てるように、当時の資料をできる限り集め、氣比神宮前カグヘルで、当時の写真やデザイン画などの貴重な資料の展示を行います。

B たいこ判おくのほそ道

松尾 たいこ 11.3 [WED] - 11.13 [SAT]

松尾芭蕉が見ていたであろう敦賀の景色を想像し、思いを馳せながら、松尾たいこ氏の大型作品を、駅前から本町通りに計5点の展示をします。さらに、空き店舗を活用した「特設アトリエ&ギャラリー」では作品展示とともに、最終日に向けて作品を完成させます。そのあと同氏のトークショーも予定しています。

C 商店街店舗に描くまちなかアート

DAISUKE・石丸 智恵 11.13 [SAT] - 11.23 [TUE]

福井市出身の3Dアート作家 DAISUKE氏と地元敦賀のチョークアート作家 石丸智恵氏が本町商店街のお店の軒先や壁などちょっとした場所に小さな、でも楽しいアートを描いていきます。商店街はいつもわくわくできる最高の場所でした。もう一度アートを探しながら商店街をゆっくり散歩してみてください。きっとアート以外の新しい発見と出会いがあると思います。



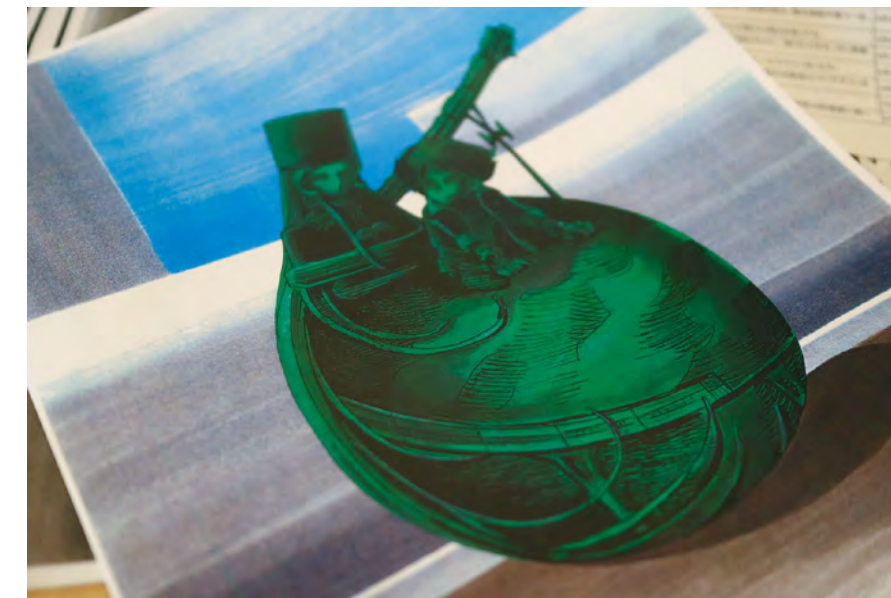
EVENT

A

1999 ◀ 2021

敦賀はいつも港と鉄道で沸騰する

～銀河鉄道999・宇宙戦艦ヤマト。日本で唯一のアート作品を知り尽くす～



敦賀港開港100周年を記念して、官民を挙げて行われた「敦賀市シンボルロード化整備事業」において、鉄道と港そして科学都市敦賀をイメージできるキャラクターとして、松本零士氏の銀河鉄道999、宇宙戦艦ヤマト関連のブロンズ像を設置しました。これらをまちの資産として、再度誇りが持てるように、当時の資料をできる限り集めて氣比神宮前カグヘルで展示を行います。

11.3 [WED] - 11.19 [FRI]

@KAGURU(カグヘル)

「シンボル」が生まれる時

坊 正明 さん(株式会社ジャクエツ)

スペースデザイン開発課 プロダクトデザイン課長

1916年に幼稚園の運営から始まった「ジャクエツ」は、敦賀市を拠点に子どもを対象とした教材や遊具などの開発製造を行う企業です。敦賀港開港100周年事業でモニュメントの企画が上がった時、立体やブロンズ像の製造にも長けたジャクエツが選ばれました。モニュメントの数は合計28体。坊さんも『銀河鉄道999』と『宇宙戦艦ヤマト』の原作を読みながら場面選定に当たりました。

「数々の名場面からどこを抽出するかという選定の作業は大変でした。普通、有名な作家さんとやりとりをする場合って事務所の方が対応すると思うんですが、『零時社』(松本零士氏の事務所)に電話をすると松本先生ご本人が出てくださって、直接松本先生に伺いながら進めていきました。あの時はインターネットもメールもありませんが設置までに時間も限られており、実際に東京の事務所まで伺いしたり、郵送で書類を送ったり、何度も何度も対応していただきました。場面が決まった後、いよいよ



立体にする時もさらに密なやりとりが重ねられました。ブロンズ像の制作は、高岡市の鑄造会社に依頼。立体にした後の細かな修正も大変だったと坊さんは言います。「例えば、サーシャの鼻の形はもっとこうとか、沖田艦長の帽子の位置を修正するとか。実際に立体になってみないとわからない部分が出て、そこを細かく見ていただきました。なにしろ28体もあったので、必死に締め切りに間に合うように対応したというのが思い出ですね」そんな坊さんのお気に入りのモニュメントは『宇宙戦艦ヤマト』の「アナライザー」。「やっぱりメカニックな感じがとてもしっかりしていますよ。設置から20年経ちましたが、原作を知らない方も多くなってきました。ちょうど今年2021年10月に『宇宙戦艦ヤマト』の新章が映画公開されますので、それをきっかけに知っていただき、このシンボルストリート歩きをいただけたら嬉しいです。

座るだけで人々の視点を変える ストリートファニチャー

11.3 [WED] - 11.24 [WED]

@氣比神宮前 屋外広場



通りにベンチが少ないと言われる日本でここ数年「ストリートファニチャー」なるものが街の活性化にきっかけとなる事例が多く見られるようになりました。単なる従来のベンチではなく、愛着や発見を持って通行する人々が積極的に使う椅子、机のこと。敦賀でもそんなストリートファニチャーを設置しようという動きが、地元の鉄工職人・窪田さんと高浜在住のデザイナー・鈴木さんのチームによって生まれています。その名も「ON+DO (オンドゥ)」。なんと外で使える量と鉄の融合による椅子です。鈴木さん「ちょうど僕たちが屋外に置く椅子を考えていた時に、港都つるがの阿部俊二さんがストリートファニチャーを作っている人を探していて、タイミングよく僕たちを見つけてもらえたんですよ。その椅子は鉄と量の融合による『悟りの椅子』と『迷いの椅子』です。孔子の言葉に『水は方円の器に随う』というのがあり、水は四角の鉢に入れば四角く、丸い鉢に入れば丸くなることから転じて、人も環境によって見え方が変わることを示し

窪田 健司 さん(窪田製作所)
鈴木 俊次 さん(Ageha Design Studio)

ています。このことを椅子に座った時に感じてみてほしいという思いで作りました。その形は真ん丸と真四角。背もたれと座面に量が数かれ、骨組みは鉄でできていてまるでアート作品のような椅子です。しかも、座面の腰の下に当たるはずの脚がなく、横から見ると浮いているかのよう。窪田さん「鈴木さんがデザインする時は、あえて制約を考慮しないようにしています。だからこそ、僕たちも挑戦がいのあるものが生まれる。今回制作した椅子も量のまま屋外で耐えられるように工夫しました。また、真ん中の足がないのも、どうやったら人を支えられるのかと量の角度などいろいろと試しましたね。座面が宙に浮く感覚は座ってみたいとわからないので、何か変わったものだと恐れずに座ってもらいたいですね。まだまだ始まったばかりですが、これからも未知の領域に挑戦してみたいですね」

たいこ判おくのほそ道

～あるく・みつける・つなげる～



大切なものはそこにある

05

敦賀といえば、やはり海の幸。春はメバルやコウイカ、夏はサザエやキス、秋はマサバや甘エビ、冬は有名な越前がにや敦賀ふく、敦賀真鯛…書き切れないほどのおいしいものが溢れています。それは恵みの海のおかげ。美味しいお魚たちをいただく笑顔になります。明日の希望にもなります。だから、ありがとう。



松尾芭蕉 × 松尾たいこ

W松尾による

空想の敦賀路に思いを馳せる

11.3 [WED] - 11.13 [SAT]

最終日(13日): 松尾たいこトークショー

◎旧藤井商会

松尾芭蕉が敦賀に滞在して見ていたであろう美しい景色を想像し、思いを馳せながら、松尾たいこ氏が制作した作品を大型シートに出力して、駅前から本町通りに計5点の展示をします。さらに本町通りの空き店舗を利用した「特設アトリエ&ギャラリー」では氏の作品展示とともに、最終日に向けて作品を完成させます。そのあと同氏のトークショーも予定しています。



02

だれにでもひらかれた扉

敦賀港は明治からヨーロッパとの交通の拠点。ロシアのウラジオストクまでの航路のおかげで、1920年代にはポーランド孤児、1940年代には杉原千畝が発給した「命のビザ」を携えたユダヤ難民が上陸した日本唯一の港となりました。彼らを受け入れた敦賀の人々の優しさは開け放たれた扉。その先には自由の地。

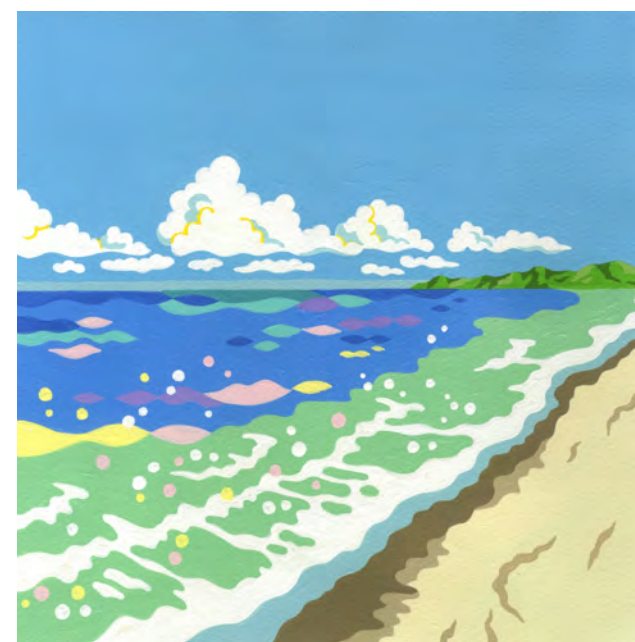
■松尾たいこの思い

松尾芭蕉は1689年「おくのほそ道」で敦賀に滞在し、氣比神宮や金ヶ崎などを歩き、俳句を詠みました。あの日、芭蕉が見た敦賀の景色を想像し思いを馳せながら、自分の作品で表現したい・描きたいと感じています。敦賀には、昔から親しまれ愛されている美しい場所がたくさんあります。また、古くから港町として発展してきたまちです。敦賀ーウラジオストク(ロシア)間の航路のおかげで海外の人々を救うという大きな役割も果たしました。そんな優しさや包容力はいまでも敦賀の人々に根付いているのではないのでしょうか。敦賀を「あるいて」美しい場所や人々の優しさを「みつけて」未来に「つなげる」。アートを通して、そんなことが小さくスタートできたら嬉しいです。

01

ゆうゆうとその大地を楽しむ

自然あふれる敦賀には、季節ごとの美しさがあります。雄大な山々、田植えの水が張られた水田とそこにたたずむ白鷺、新緑が風に揺れるさわやかな季節、たわわに実った稲穂が輝く実りのころ。そんな四季折々を空の上から悠々と眺め「ピーヒョロロ」と高らかに歌うトンビは幸せそうです。



03

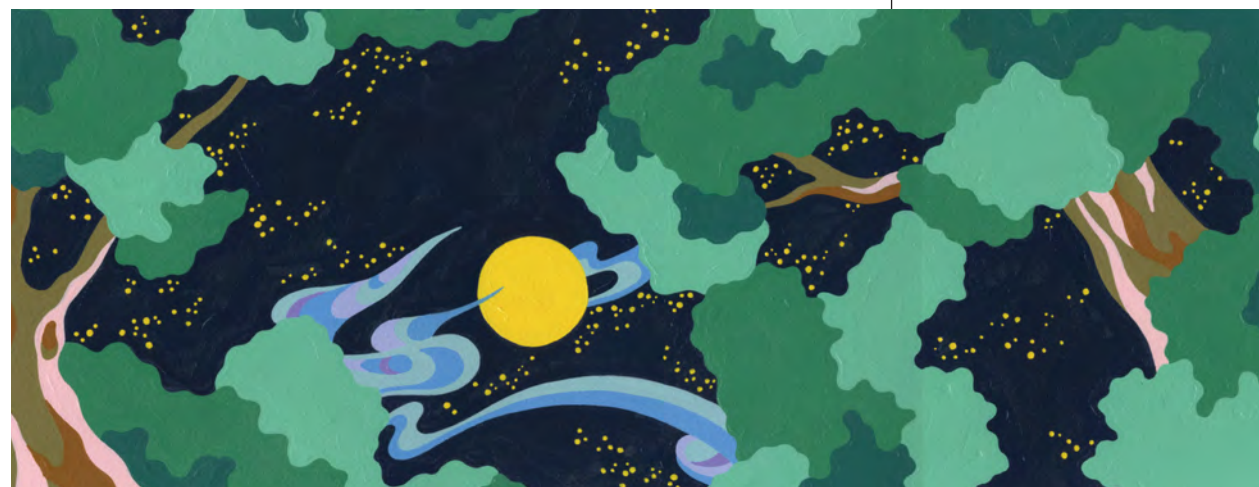
キラキラと輝く先にあるものを見つける

日本海という荒々しい波のイメージがありますが、もちろんそんな日もあります。ふだんは種やかで、まるで南の島に来ているような透き通った美しいエメラルドグリーンのキラキラと輝く海を楽しめます。どこまでも続く白い砂浜に座って、水平線を眺めているだけで贅沢な時間が過ぎていきます。

芭蕉の気持ちになって月を眺める

「おくのほそ道」の道中、敦賀を訪れた松尾芭蕉。「中秋の名月」を楽しみにしていたのですが、宿の主人に「明日は晴れるかわからない」と言われ、前日に「氣比神宮」を参拝。月上かりに照らされた神前の白砂とその云われに感動し「月清し遊行のもてる砂の上」と詠みました。芭蕉が眺めた月の光はこんな感じだったのかな?と想像してみました。

04



松尾 たいこ

アーティスト/イラストレーター

広島県呉市生まれ。大手企業の広告などにも多く作品を提供、手がけた本の表紙装画は300冊を超える。角田光代や江國香織との共著やエッセイも出版。イラストエッセイ『出雲IZUMOで幸せ結び』(小学館)『古事記ゆる神様100図鑑』(講談社)を発表するなど、神社や古事記にまつわる仕事も多い。それらの経験を通じ、森羅万象に神が宿るという古代日本の概念に共感し作品での表現を追求中。NHK「トップランナー」「日曜美術館」などに出演。現在、東京・福井・軽井沢の三ヶ所を拠点に活動している。

ホームページ
taikomatsuo.com
Instagram
@taikomatsuo



C 商店街店舗に描くまちなかアート

～子ども気分でまちなか散歩～

アートを探して歩きながら
商店街とまちなか風景を
ゆったり楽しむ

1970 ◀ 2021



DAISUKE さん セットアップアーティスト

絵でまちを変えられるんじゃないか。そんな想いを持って福井駅前できさびを打ってきました。描いたら終わりじゃない。お客さんがその場所に来る何かのきっかけになればいいと思って活動を続けています。誰かがワクワクしたり喜んでくれるのを見るのが一番幸せなので、仕掛けをつくり続けたいですね。今回はまずは子どもたち。近くにある保育園の子どもたちが楽しんでくれたらいいなと。ストリートアートはまちなかの美術館。立ち止まってアートに気づく、それを探していたら自然とまち歩きになったみたいなのがいい。まちは人だと思っんです。作りっぱなしにしないで、その作品が完成してもその場において、まちの案内人を担うのが自分の理想。作品を通じてお客さんや商店街オーナーの会話も増えれば、まちはきっと楽しくなる。できれば敦賀にもしばらく滞在して、みなさんとお話したいです。

38歳で本格的に活動をスタートしたDAISUKEさん。独学で自分のスタイルを確立し、福井駅前の壁面にトリックアートなどを手がけた彼の作品はフォト&インスタ映えスポットとして話題を呼びました。代表作に福井駅前ガレリアポット巨大壁画などがあります。



絵でまちを変えるきっかけをつくりたい



石丸 智恵 さん チョークアーティスト

絵を描くことは物心がついた時から、当たり前のことでした。小さい頃は家中がキャンパス。4、5歳の時の誕生日プレゼントに水彩絵具とスケッチブックをもらったのは懐かしい思い出です。今回の企画は単純におもしろいと思いました。敦賀はアートに身近に触れられる場所がないので、歩いているときに「なんだこれは！」と楽しんでもらえたらいいですね。例えば、子どもたちが道に描いた絵と絵の間をジャンプして遊んだり、子どもたち自身も絵のまわりにチョークで描いて遊んでくれてもいいですね。とにかく自由に絵に触れてもらえたらいい。それで絵が消えたりしても本望です。残すことだけが正解じゃない、楽しんでもらって、結果絵が消えてしまっても、その時の思い出や経験は残りますから。若い子達が大人になった時に「こんなことしたいな」と次に繋がればいいですね。自分の感性を大切に作るきっかけになったら嬉しいです。

デジタルの商業イラストレーターを経て、旅先の奈良でチョークアートに出会ったのがきっかけでアナログな手書きアートの世界へ足を踏み入れます。京都のチョークアーティストに師事。2013年8月プロ認定。ライフワークの作品に「アメーzing敦賀」など。



自由に楽しんで！

11.13 [SAT] - 11.23 [TUE]

@本町商店街 店舗の軒先や壁面

福井市出身の3Dアート作家 DAISUKE氏と地元敦賀のチョークアート作家 石丸智恵氏が本町商店街のお店の軒先や壁などちょっとした場所に小さな、でも楽しいアートを描いていきます。商店街はいつもわくわくできる最高の場所でした。もう一度アートを探しながら商店街をゆっくり散歩してみてください。きっとアート以外の新しい発見と出会いがあると思います。

本町1丁目を サブカルストリートに!!

株式会社つるが大丸
本町1丁目商店街振興組合 理事長
小坂 政徳 さん



氣比神宮の南側すぐにある商店街が「本町1丁目」。飲食店、書店、果実店、質屋など多様な個人店が40軒以上連なり、その歴史は50年を超えます。7年前から理事長を務める小坂さんは、「リビング大丸」で家具販売・ミシン修理を行っています。元々関東の方で家電量販店に勤めていた小坂さんは、家業を継ぐために24年前に帰郷した頃、すでに松本零士氏とのコラボによる「シンボルストリート」が完成していたそう。「せっかくこんなに素晴らしいモニュメントが28体とたくさんあるのに、僕が帰省した頃にはあまり活用されていない印象でしたね。たまたまうちの家業がミシン修理で、自分でも衣装を作ることは得意だったので、じゃあ観光客の方がコスプレ体験をして通りを歩けるようにしたいんじゃないかと思ったんですよ」小坂さんのとめどなくあふれる自由なアイデアによって、「車掌」「キャプテンハーロック」などの衣装ができあがり、県外から訪れた作品のファンや観光客がこのサービスを

利用しました。また、衣装には着脱が簡単のようにボタンをマジックテープにしたり、子ども用のサイズのものを用意したりと小坂さんらしいこだわりが詰まっています。「僕はこの本町1丁目をサブカルチャーのストリートにしたいんですよ。僕自身が楽しいことを続けたい。アートや音楽、ダンス、アニメなど、まずは商店街に足を運んで楽しんでもらうための仕掛けを小さいことからチャレンジしたい。10月9日には『ほんいちマルシェ』で痛車の展示をお願いしたのですが、マルシェの当日は僕らは自分の店をとにかく開けて、店に入ってもらおう。その連携が取れば本来の商店街の活気につながると思います」小坂さん自身、バンドを組んだり、同人誌を楽しんだり、サブカルチャーに親しんできました。彼のアイデアがいろいろなジャンルの人々を動かし、これからの本町1丁目を新しく盛り上げていくはずですよ。



みやがわ果実 景山恒典さん、西浦陽子さん

お店はここで60年。元々は菊の花や大葉など、敦賀で唯一、割烹料理屋などで使われる食材も扱っている八百屋でしたが、4、5年前から果物に特化するようになった。「今は注文をいただいてから手作りするカッティングフルーツの盛り合わせや、季節のフルーツを届ける頒布会などの商品が好評をいただいています。『まちなかアート』で商店街を楽しむコンテンツが増えたら嬉しい。私たちも『ほんいちマルシェ』の参加やフルーツカットの教室などにチャレンジしながら、ここへ訪れた方々がいろいろな形で楽しめる商店街にしたいです」



千田書店 文室千代さん 静代さん 親子

明治に創業して127年!新聞と書籍を扱うお店から始まり、教科書販売による地域貢献が認められ、2011年には先代の文室昌己さんが黄綬褒章を授与されるほど、地元で親しまれ続けているまちの本屋です。「2020年に国道8号は綺麗に整備されましたが、コロナの影響で『敦賀まつり』が2年にわたり中止になりました。せっかくきれいになった街並みを知らない人も多いはずなので、ぜひ『まちなかアート』を探して歩きながら、商店街でワクワクを感じてもらえたら嬉しいです」



リサイクルコレクション モノセブン 武井稔さん

実家の質屋から独立し、14年ほど前に福井市から敦賀市へ、質屋は地域のセーフティネットです。「地域のお客様を大事に」をモットーに、現在は若手育成をしながら店舗運営をしています。「アートをまちにということですが、開業からお世話になっているこのまちに協力はいくらでもしたいと考えています。いわば恩返しですね。そして、もっと若い方がチャレンジしやすい商店街にならなくては。僕自分が個人事業主としていろいろなことをやっている姿をみてもらって、1人でも若い人たちが自分もと続けてくれたらと切に願います」



オーディオ渡辺 本町2丁目商店街振興組合 理事長 渡辺 晃 さん

実家が電気屋を営み、1975年に独立オープンしたオーディオ渡辺。青春時代はザ・ベンチャーズでエレキギターが大流行。敦賀高校で初めてバンド活動をしたのは渡辺さんたちだったそう。現在はギターを中心とした楽器、オーディオ、レコードなどを取り扱い、イベント時のオーディオ機器も貸し出しています。「本町2丁目は、今回は松尾たいこさんのイラストをショーウィンドーに飾ります。これをきっかけにもっと商店街に興味を持ち、開いているお店が増えたらいいなと思います。音楽企画もまたやっていきたいですね」

